



催眠好きで すなね？

～アイドルだって発情させます～

著 田中珠
画 よろづ
原作 デイジー・ゼルマイン



ぴろろ文庫

目次

プロローグ 手の届かない世界	005
第一章 謎のDVD	021
～催眠の力であの娘を脱がせ!～	
第二章 復讐1	044
～生意気な幼なじみにフェラチオの天罰を～	
第三章 復讐2	071
～学生会長様の処女をいただいてやれ!～	
第四章 女教師の性教育	115
～クラスメイト達の処女を奪え!～	
第五章 全裸授業なんて当たり前	155
～アイドルの昼食は俺の肉棒～	
第六章 あの娘の部屋でお風呂で	171
～憧れのアイドルの生オナニー!!～	
第七章 初夜	196
～アイドルと結ばれる夜～	
第八章 発情した獣達	220
～狂乱の全校集会～	
第九章 あるオタクの存在証明	235
～生放送でアイドルとナマ本番～	
エピローグ 世界だって発情させます	264



「ああ、真菜ちゃん! 真菜ちゃんっ!
真菜ちゃんっ! 俺が真菜ちゃんの初
めての男になるんだよ!」
心の中で真菜に語りかけながら、狭
くキツイ膣穴を、押し広げていく。
『ウアッ!? くうっ! ヒインッ!
はっ、はひっ、ヒウウウッ!!』

る。

淫蕩そのものといった光景だった。あのトップアイドル、真菜が全裸で顔中にぶちまけられたザーメンを舐め取っているのだ。

（うっ……うっ……真菜ちゃんが、俺のザーメンを美味しいって……あんな美味しそうな顔して食べてくれる……）

その姿に、純人の眼にまた新たに感動の涙が溢れ出てきてしまう。

人目が無ければ、真菜を抱きしめていただろう。

そんな衝動を懸命に抑えながら、純人は顔を精液まみれにした真菜を涙でぼやけた眼で見つめ続けた。

第六章

あの娘の部屋でお風呂で憧れのアイドルの生オナニー!!

今日一日はOFF日だったのか、真菜は最後まで授業に出た。

最後の授業が終わり、仲の良いクラスメイト達と帰ろうとする。

すかさず、純人は真菜とクラスメイトに催眠をかける。

覚えたばかりの記憶支配の催眠で、自分を空気と同じような存在に思い込ませた。

そのままクラスメイト達と他愛の無い話をしながら帰る真菜の後をつけていく。

こんなに間近に真菜ちゃんがいるのに、純人は昼のフェラ以降、真菜に何も出来ていない。もやもやとした不満を抱えながら、純人は真菜のすぐ後ろに付いていった。

「それじゃ、私、こっちだから」

「うん。また電話するね。ばいばーい」

クラスメイト達と別れると、真菜は真っすぐに家へと足を向ける。

（ここが……真菜ちゃんの家……）

純人は真菜が入っていく後を付いていき、そのまま家の中へと入っていった。

「ただいま」
行儀良く靴を揃える真菜。そんな仕草にも、真菜の女の子らしさを感じて、純人は感激する。

居間の方にいるらしい母親に声をかけ、そのまま階段を上がっていく真菜。

純人は母親にも催眠をかけようか迷ったが、このまま部屋に入って鍵でもかけられたらここまで追って来た意味が無い。

(まあ、母親が来たら、その時に催眠をかければいいだろう……)

そう考え、真菜の後を付いて二階に上がる。

真菜が自分の部屋へと入る。その後を純人が、扉が閉められるより早く入りこむ。

(ここが……真菜ちゃんの部屋なんだ……)

初めて入る真菜の部屋は、純人が思い描いた通りの女の子らしい部屋だった。

(いつまでも……後つけてるだけじゃダメだよな)

昼休みにフェラをしてもらって以降、純人はそれ以上真菜に催眠をかけるのが申し訳ないような気持ちになってしまっていた。

さしずめ、女神様を信仰する信徒のような気持ちだろうか。

しかし、真菜だって食事もすればトイレにもいく。人気絶頂のアイドルとはいえ、普通の女の子である事は変わらない。

……オナニーだつてするだろう。

(ん？ オナニー、か……真菜ちゃん、いつもどんな風にオナニーしてるのかな……)

純粋無垢な真菜ちゃんが、どんな風に自慰をしているのか。考えただけで純人の股間が固くなる。

(よ、よし……真菜ちゃんに、いつもと同じ方法でオナニーをするように催眠をかけよう)

純人はまだ少し躊躇ってしまう気持ちを押し切り、靴の中のを片付けている真菜の前で指を操り、いつものやり方でオナニーをするように催眠をかけた。

「俺が良いと言うまでオナニーし続けるんだ」

「ふぁ……あぁ……」

催眠をかけられた真菜が、フラフラとベッドの方に向かった。

「どうしよう……私……急に……。こんなの、ダメなのに……あ……」

(やった……!!)

ベッドに身を横たえた真菜が、片手を乳房に、もう片手を股間部へとあてる。

服の上からゆっくりと乳房を揉みしだく真菜ちゃん。

「ふぁっ……んうっ……くうっ……フウウウッ」

服の上からでも分かる柔らかそうな乳房が、真菜の手つきに応じてむにつ、むにつと形を変える。

薄っすらと頬を染め、軽い吐息を漏らしながら、真菜が微弱な刺激を堪えている。その姿に、純人の股間がムクムクと盛り上がってくる。

「ソッ……ファッ!? ふっ、ふうっ……はふうううっ」

乳房を揉みしだいたまま、ショーツの上からゆっくりとワレメをなぞる指。

制服姿のままスカートをまくりあげて、真菜が自慰をしている——目の前で、あの真菜が自慰をしているのだ！ 純人の呼吸が自然と荒くなる。

(真菜ちゃんでも、やっぱりオナニーするんだな……)

女神様のような存在だった真菜の女の子らしい一面。そんな一面を見せられると、益々惹かれてしまう。

自分しか知らない真菜の姿をもっと見たい。純人の心にそんな欲求が込み上げてくる。

「フウッ……ソッ、ニアッ……はあ、はあっ……くふうウウウッ」

緩やかだった手の動きが、少しずつ激しくなつてくると、真菜の声も大きくなってくる。

「ああ……んっ……ダメ……こんな事……シチャダメ……なのに……」

オナニーへの背徳感があるのか、真菜は、キュッと臉を閉じながら身悶える。

(そんな事ないよ真菜ちゃん！ 誰だつてするんだから！)

声をかけたくなるのを我慢しながら、純人は真菜の痴態を凝視し続ける。

「ハフッ……ふうっ……くうっ……はあ、はあっ、ニアッ……はっ……ふうウウッ……」

喘ぐような声に熱がこもり、乳房を掴む手にギュッと力が込められる。

制服の上から、白く細長い指が乳肉に喰い込む。

「ニアッ……クウウッ……お勉強もしなきゃダメ……なのにい……ああ、こんなエッチな事してるなんて……っ……フウウッ、んウウッ」

真菜の視線が、チラッと机へと向けられる。

しかし、催眠をかけられた今、純人の許可無しに自慰を止める事は出来ない。

「ハウンッ……ふうっ……ふあっ……んううっ、こ、これした後っ……お勉強しなきゃ……でも……ああ、手がっ……止まらなくなつてくるっ」

普通は絶対に見ることなど出来ない、アイドルの自慰。

真菜はベッドの上で股を広げ、乳肉を揉みほぐしながら、ショーツの上からシュッ、シュッと淫裂を擦っていく。

その痴態を見守りながら、純人も無意識のうちに、ムズムズと股間を弄つてしまう。

(あっ……!?)

クチュッ……。

小さな水音が聞こえたかと思うと、ショーツの上に薄っすらと染みが出来てくる。

「ファッ……ンウウッ……ああ、くうっ……はうっ……くふうううっ……んっ！ んっ！」

真菜自身も濡れてきているのは理解しているのか、潤んだ瞳をチラッと自分の下腹部へ

と向ける。

そしてショーツの中に指を入れると、溢れ出た蜜汁を指に絡ませる。

「こんな……濡れちゃってる……んうっ、私が……こんなエッチな子だつて知られたら……皆……嫌いになっちゃうよね……」

アイドルであるという自覚と、快感を欲する身体。その二つに板ばさみになったように、戸惑いの声を漏らす真菜。

しかし火照り始めた身体は、更なる刺激と快感を欲してくる。

……そして真菜は火の点いた自らの欲望に屈服した。

蜜汁の絡みつく指で、再びショーツを擦り始める。

（オナニーする時は、『こんな事するのは、アイドルらしくない』つて思いながらシテるのかな……）

真菜のそんな真面目さに、純人はまた強い愛しさを覚えてしまう。

（やっぱり真菜ちゃんは、俺が思ってた通りの子だ！）

真菜を自分だけのモノにしたい。

そう思う気持ちだが、純人の中で一段と強くなつていく。

「クウッ……フアアッ……ああ、気持ち……イイッ……気持ちイイよう……フウッ」

もう我慢出来なくなったのか、真菜が悦びの声を漏らす。

「指つ……止まらないのお……はっ、はあっ、ソウッ……クウウッ、ふっ、ふウウウッ」
擦り続ける指の動きが激しくなるにつれ、ショーツのシミもまた大きく広がっていく。
それでも、真菜は一度濡れそぼったアソコを確認しただけで、それ以上直接触ろうとはしない。

自慰に夢中になるのを、アイドルとしての理性が押さえ込んでいるのかもしれない。

真菜にかけた催眠は、いつもの通りに自慰をする事だった。

（真菜ちゃんらしいといえば真菜ちゃんらしいかな……）

いつも服の上から自慰をして、アイドルとしての自分を保っているのかもしれない。

純人が興奮にひたつたまま、そんな事を考えていると、真菜の声のトーンが上がった。

「はあっ、んうっ……だ、ダメえ……や、やっぱり……このままじゃ……んうっ……フアッ、クウウウッ」

（ごくっ……）

純人は生唾を飲み下しながら、自慰を続ける真菜を見る。

「ハフッ……ふう……すぶく濡れてる……どうして……私、こんなエッチな子なんだろう……アンッ、ダメ……なのにい……クウウウウッ」

真菜は濡れそぼった淫裂を、おそろおそろ指で触れた。

「ヒュウンッ!? はうっ……フウッ、ふあっ……はふっ、ソウウウウウッ」



直接触れる刺激に、ビクンツと腰を跳ねさせる。

「はあ、はあっ、アフツ……………も、もし……………本当にエッチしちゃうたら……………わ、私……………ど
うなっちゃうのかな……………もつと……………エッチになっちゃうのかなあ……………」

チュクツ、チュクツと水音を立てながら膣口を弄る真菜が、少し不安そうに呟く。

「はうっ……………ファツ……………アンツ、くふううっ……………んウウウウツ」

快感に火照った頬と、熱い吐息。桜色に染まった全身が、小刻みに震え始めた。それがイク前兆であることを、純人はすぐに理解した。

「ンウツ……………フウツ……………も、もうっ……………あつ、アンツ……………キそうっ……………ファツ！　くふう
ウツ……………んウウウウウツ!!」

絶頂に向かって駆け出し始めた真菜は、膣口を弄る指の動きを激しくする。

「ンアッ！　こ、声……………出ちゃうっ……………お母さん下にいるのにつ……………んっ！　んっ！

声……………出ちゃうっ！　んふうウウウウツ！」

絶頂時に放たれる歓喜の声を、懸命に堪えるように唇を噛む。

（イクんだ……………真菜ちゃんがイク……………）

純人の眼前で、今まさに真菜は絶頂を迎えようとしていた。

「い……………イッチャうっ……………あつ！　もうっ……………イッチャうっ！　んんウウツ!!」

真菜の形の良い眉根が切なそうに歪められ、可愛らしい唇から、悦楽の音が溢れ出る。

ぶちばら文庫

催眠、好きですよね？ ～アイドルだって発情させます～

2011年 10月28日 初版第1刷発行

■著 者 田中珠
■イラスト よろづ
■原 作 ディーゼルマイン

発行人：久保田裕
発行元：株式会社パラダイム
〒166-0011
東京都杉並区梅里2-40-19
ワールドビル202
TEL 03-5306-6921

印刷所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをすることは、
かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©TAMA TANAKA ©2011 Dieselmime

Printed in Japan 2011

PP029